

# **第2章**

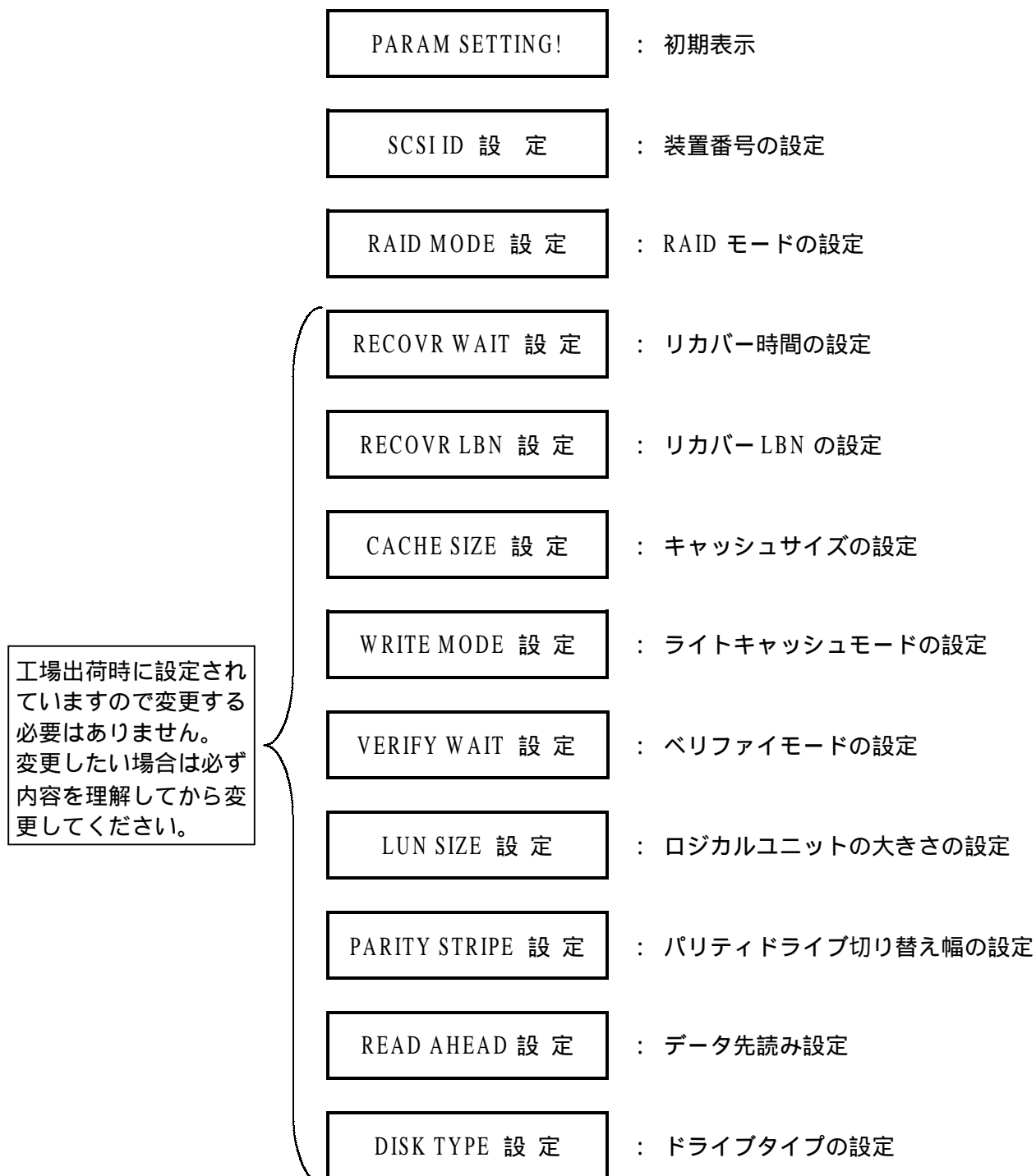
## **セットアップ**

### **RDS-LP Series**

### **USERS MANUAL**

## 第2章 セットアップ

### 2.1 セットアップモードのトグル式フローチャート



## 2.2 セットアップ概要

RDS-LP はセットアップ作業を簡素化するため、本体前面パネルにて各項目を選択することで容易に設定できるよう設計されています。

各項目は、RAID-5 でのご利用を想定してデフォルト値を設けてあり、特別な場合を除き SCSI ID の設定のみで使用可能です。

なお、誤動作を避けるため実際の使用中においては、設定内容は変更できない様になっています。

## 2.3 セットアップ画面の使い方

ここでは、セットアップ画面の使い方全般について説明します。

はじめに前面パネルをコイン等で開けてください。☞「はじめに ドライブ装着の確認」  
はじめてお使いになられる場合には、MODE スイッチを押しながら電源を投入して、RDS-LP の動作状態を保持しているメモリの内容をクリアにしてからセットアップを始めてください。

(MODE スイッチを押さないで電源を投入した場合、「ONE DOWN」、「SYSTEM DOWN」の表示が出る場合があります。)

RAID-5 NORMAL

MODE スイッチと SELECT スイッチを両方押した状態で電源を投入しますと、パラメータ設定モードに入ります。

PARAM SETTING!

MODE スイッチを押すことにより、項目の選択ができます。  
SELECT スイッチを押すことにより、各項目のパラメータ変更ができます。  
ユーザー自身がセーブの操作を行うまではセーブされません。

パラメータ設定の開始 : MODE スイッチ + SELECT スイッチ + 電源 ON

パラメータ項目の変更 : MODE スイッチ

パラメータの変更 : SELECT スイッチ

☞「2.6 スイッチ操作方法一覧」

セットアップの内容を変更した場合、必ず前面パネルのMODE スイッチと SELECT スイッチを同時に押し、ROM に書き込みを行ってください。

書き込みが終了しますと、

POWER DOWN NOW!

の表示になりますので電源を切ってください。

書き込み操作を行わずに電源を切った場合、変更した内容は失われ変更を行う前の状態のままとなります。


書き込み操作終了後、電源を切るか SELECT スイッチを押して、通常動作モードにしてください。  
(SELECT スイッチは、2~3 秒間押し続けます。)

MODE スイッチを押した状態で電源を投入しますと、RDS-LP の動作状態を保持しているメモリの内容はクリアされますのでご注意ください。(システムリセット状態になります。)

通常動作モードに入る場合は、スイッチを押さずに電源を投入してください。

設定の書き込み : MODE スイッチ + SELECT スイッチ  
電源 OFF または SELECT スイッチ

設定の取り消し : 変更中に そのまま電源を切る。

 「2.6 スイッチ操作方法一覧」

## 2.4 セットアップ画面とその動作

各項目におけるパラメータは、接続するホストおよび使用する業務内容により変更してください。ここでは、各パラメータにおける RDS-LP の動作内容について説明します。

### SCSI ID 設定

SCSI ID 0

RDS-LP の SCSI ID を設定するための項目です。

表示内容	機 能	備 考
0 ~ 15	RDS-LP の SCSI ID 番号の選択。 (0~15 の間で設定。8bit SCSI の場合は 0~7)	デフォルト 0

RDS-LP に対して SCSI ID を割り当てます。


RDS-LP を接続するホスト上で、未使用の SCSI ID を割り当ててください。

RDS-LP のパラメータ設定登録後、RDS-LP とホストコンピュータを接続します。

 「第1章 1.7 取り付け/接続」

最初に RDS-LP の電源を入れ、しばらくして(数 10 秒後)ホストコンピュータの電源を入れます。

ホストコンピュータより RDS-LP が認識できましたらセットアップ完了です。

RDS-LP のフォーマットを行います。  「第3章 フォーマット」

## RAID モード設定

RAID MODE 5

RDS-LP をどの RAID レベルで使用するかの選択をします。

 「第1章 1.3 RAID モードの説明」

表示内容	機 能	備 考
ONE DRIVE MODE	ドライブ1台で動作するモード。	
RAID MODE 1	ライト時は、同じデータをドライブ2台に書き込み、リード時は、1台(もしくは2台)のドライブから読み出します。	
RAID 0 2 DRIVE	パリティ処理を行わずドライブ2台のみで動作して、2台のドライブをデータドライブとして使用するモード。 ドライブ1台でもダウンすると「SYSTEM DOWN」になります。	
RAID 1 3 DRIVE	ライト時には、ドライブ3台に同じデータを書き込み、リード時には、1台(2台または3台)のドライブから読み出します。 従って、ドライブが1台ダウンしても「RAID MODE 1」のまま動作します。	
RAID MODE 0	パリティ処理を行わず全てのドライブをデータドライブとして使用するモード。 スピードは最速ですが、ドライブが1台でもダウンすると「SYSTEM DOWN」になります。	
RAID MODE 3	データドライブ2台とパリティドライブ1台として使用するモード。 ドライブが1台ダウンしても、ダウンしたドライブのデータをパリティ処理により、他のドライブのデータから合成して処理を続行するため、ホストからは正常なドライブとして見えます。	
RAID MODE 5	「RAID MODE 3」で固定していたパリティドライブを各ドライブに順番に割り振ったモード。 「RAID MODE 3」では、パリティドライブに集中する負荷が各ドライブ均等になります。そのため「RAID MODE 3」より信頼性の高いモードです。 しかし、パリティ割り振り境界においては、ホストから1つのコマンドをアレイコントローラ内で複数回のコマンドに分割して処理する必要があるため、大きな単位でアクセスの場合「RAID MODE 3」より若干遅くなる場合があります。	デフォルト

## リカバリー待ち時間設定

RECVR INTV 5S

リカバリー動作は、ホストからのアクセスの合間をぬって行っています。  
従って、リカバリー中でも運用し続けることができます。  
リカバリー中において、ホストからのアクセスとリカバリー動作の関係を選択します。

表示内容	機 能	備 考
RECVR WAIT 0S	ホストからのコマンド間で、1 回以上のリカバリー動作が入るモード。 ホストからのアクセスがほとんど連続的に発生する使用環境において、ホスト処理が遅くなってもとにかくリカバリーを優先する必要がある時に使用します。 ホストからのコマンドに対する処理は、リカバリー中にかなり遅くなります。	
RECVR WAIT 0.1S	ホストコマンドが連続している間は、ホストコマンドを優先して、ホストコマンドがなくなって 0.1 秒以上経過するとリカバリー処理を行うモード。 次にコマンドが発行された場合は、一連のコマンドのうち、最初のコマンドのみ最大 1 リカバリー単位の時間待たされます。 リード/ライトコマンド以外や、リードキャッシュにヒットした場合などは待たされません。	
RECVR WAIT 1S	ホストからのコマンドが散発的で、連続していても 0.1 秒をしばしば越えてしまうような場合に有効なモード。 アクセスの間隔が時々 1 秒以上あることが必要です。さもないといつまで待ってもリカバリーが終了しません。	
RECVR WAIT 10S	通常使用しません。 めったにアクセスが発生しないような使用環境では有効かもしれませんがありません。	
RECVR INTV 0.1S 1S 2S 5S	必ず設定時間内に、1 回のリカバリー動作が実行されるモード。 ホストからのアクセスが、途切れることなく連続して行われるような状況では有効です。 Interval 時間を短くするとリカバリー動作が優先され、長くするとホストのアクセスが優先されます。	デフォルト 5S

## リカバー-LBN 設定

RCV LBN 96KB

リカバーサイズのLBN(Logical Block Number)設定で、リカバーを行う場合の1リカバー単位あたりの書き込み(実際は Write & Verify をドライブが行う)サイズの設定です。

表示内容	機 能	備 考
RCV LBN 64KB 96KB	設定サイズ単位でリカバーを行います。 設定値を大きくとれば、リカバー終了時間を短くすることができます。 ただし、1リカバー単位あたりの処理時間は長くなります。 (「64KB」で 20mS 程度)	デフォルト 96KB

## キャッシュサイズ設定

CACHE 64MB

RDS-LP に搭載しているキャッシュメモリの容量を設定します。

表示内容	機 能	備 考
CACHE 64MB 128MB	搭載しているメモリの容量を設定します。 搭載容量と設定値が異なっている場合、「Cache Buffer Error」が発生する可能性があります。	デフォルト 64MB

## ライトキャッシュモード選択

W PEND 0.1Sec
---------------

RAID-3/5 において、書き込み動作はパリティのジェネレーションを伴うなど単一ドライブの書き込みより時間が必要です。そこで、ライトキャッシュが有効になります。ここでは、キャッシュからドライブへの書き込みを行うタイミングを設定します。ただし、RAID-3/5 において「ONE DOWN」の時は、この設定に関わらず全て「WAIT」になります。

表示内容	機 能	備 考
WRITE WAIT	ドライブに対する書き込みが終了するまで待ってから、ホストのコマンドを終了するモード。 もっとも一般的でかつ確実です。 ライト時には、キャッシュが機能しませんので、転送速度は「W PEND」モードに比べ落ちます。 ただし、リード転送速度は「W PEND」モードとほぼ同等です。	
WRITE BUFFER	データをキャッシュメモリに取り込んだ状態で、ホストのコマンドを終了すると同時に、ドライブへの書き込みを開始するモード。	
W PEND 0.1Sec	データを受け取ってホストのコマンドを終了した後、0.1 秒たってから他のコマンドの合間をぬって書き込みを行うモード。 シーケンシャルライト等においては、キャッシュ上でライトデータをつなげていき、ホストから複数のライトコマンドで受け取ったデータを 1 回にまとめて書き込む等により、書き込み時間の短縮が計れます。	デフォルト
W PEND 1 Sec	書き込みまでの待ち時間を 1 秒にしたモード。 ホスト側のタイミングにより、0.1 秒にまたがるシーケンシャルライト等がある場合に有効です。	
WP ALL 0.1Sec 1 Sec	「ONE DOWN」時にもキャッシュを有効にするモード。	

## ベリファイモード設定

V WAIT , R aft W

ベリファイモードをベリファイ終了まで待つ「V WAIT」と、ライトコマンドと同様の処理を行いベリファイしないモード「NO V」のいずれかに設定します。

また、書き込み後のキャッシュデータを無効にしてリードリクエストがあった場合、再度ドライブから読み出す「R aft W」と、書き込んだデータをそのまま有効なデータとしてリードリクエストに対してドライブから読まずにキャッシュ中のデータを返す「NO R aft」のいずれかを設定します。

表示内容	機 能	備 考
V WAIT	Write の場合、キャッシングしていたとしてもライト&ベリファイコマンドを受け取ると Write の終了待ちをするモード。	デフォルト
NO V	ライト&ベリファイを単なる Write コマンドとして処理するモード。 ただし、ベリファイコマンドでは、通常のベリファイを行います。	
R aft W	ベリファイコマンドのかわりに Write した後、Read してデータを確かめる場合がしばしばあります。このためには書き込むデータをキャッシュ中から捨て、リードリクエストがきた時、先に書いたデータをドライブから読み込まないと意味がありません。 そのため、このモードでは、キャッシュ中の Write したデータは全て無効にします。	デフォルト
NO R aft	本来ライトキャッシュをする場合には、ドライブの書き込みを待たずに正常に書けることを前提にしています。 これは RAID-3/5 の場合は、同時に 2 台のドライブがダウンすることはないという仮定に基づいている訳です。 この考え方からすると、書いたものはそのまま読み出せるものと仮定することも 1 つの方法です。 この設定では、そのような仮定により書き込んだ後もキャッシュ中のデータを有効にします。	

## LUN SIZE 設定

LUN SIZE FULL

表示内容	機 能	備 考
LUN SIZE FULL	ディスクアレイ全体を1つのLUNとして扱います。	デフォルト
LUN SIZE 2GB ~ 32GB (2GBステップ)	ディスクアレイ全体を LBA 0 から容量ごとに分割して扱います。 1GB=1024MB	
LUN SIZE 2000MB 4000MB	ディスクアレイ全体を LBA 0 から 2000MB で分割して扱います。 OS の関係から、2GB/4GB より若干小さな容量で分割します。	
LUN SIZE 1/2 ~ 1/8	ディスクアレイ全体を 1/2、1/3、1/4、1/5、1/6、1/7、1/8 の等分割で扱います。	

## ドライブモード設定

DRIVE MODE 3

動作ドライブの数を設定します。  
この設定の変更はできません。

## パリティストライプ幅設定

STRIPE 2 MB/CH

RAID-5 におけるパリティドライブ切り替え幅のサイズを選択します。

表示内容	機 能	備 考
STRIPE 1 MB/CH 256KB/CH 128KB/CH 2 MB/CH	<p>CH(ドライブ)あたりのストライプサイズを設定します。            ホストからの単一コマンドが、パリティドライブの切り替え位置をまたいだ場合、ドライブアクセスは 2 つ以上のコマンドに分割して処理されます。            そこで、この切り替えによるオーバーヘッドを最小限にするためには、ホストからのコマンドにおけるアクセス単位に対して、十分大きなストライプ幅にすることが望まれます。            一般的にこのサイズが大きい程、連続読み込み / 書き込みが速くなりますが、通常 OS 側がある程度大きなブロックで読み書きしますので、通常のアクセスであれば 2MB が最適です。            アプリケーションによっては、この値を変更することによりパフォーマンスが良くなる場合があります。</p>	デフォルト 2 MB/CH

## データ先読み設定

READ AHEAD 64KB

リードコマンドにおいて、リクエストされているデータよりどのくらい余分にキャッシュの中にリードしておくかを設定します。

表示内容	機 能	備 考
READ AHEAD 0KB	全く先読みしません。 リードに対するキャッシュ効果は、ほぼ0です。 ただし、ディレクトリ等、頻繁にアクセスされる領域はヒットする場合があります。	
READ AHEAD 8KB	ページ終了まで先読みするモード。 キャッシュは、バッファセグメント単位(ページ)で管理されています。 ランダムアクセス主体のオペレーションでもそれなりに有効です。	
READ AHEAD 64KB	リクエストされているデータのあるページの終了までと同時に、次のページの終了まで読んでおくモード。 シーケンシャルアクセス主体のアプリケーションの場合有効です。	デフォルト
READ AHEAD 256KB	64KB の場合より、さらに 1 ページもしくは 256KB/ページサイズで決まるページ数分先読みします。 シーケンシャルアクセスが、ほとんどの画像データアクセスの場合などで有効です。	
READ AHEAD 1MB	1MB/ページサイズで決まるページ数分先読みします。 数十 MB 以上のシーケンシャルアクセスが、ほとんどの場合などで有効です。	
READ AHEAD 4MB	4MB/ページサイズで決まるページ数分先読みします。 ファイルシステムを使用せず、初めから終わりまで順番にアクセスする場合などで有効です。	

## ドライブタイプ設定

xxGB xxxxxx

使用するドライブの機種を決定します。（実際に搭載されているドライブ型式とは異なる場合がありますが、デフォルトより変更しないでください。）

製品機種	ドライブタイプ設定値	備考
RDS-90LP	30-GB 7200rpm	デフォルト
RDS-180LP	60-GB 7200rpm	デフォルト
RDS-240LP	80-GB 7200rpm	デフォルト
RDS-360LP	120GB 7200rpm	デフォルト

## ⚠ 注意



**デフォルト状態でご使用ください。**  
 変更してご使用になった場合、不具合が生じることがあります。  
 ドライブタイプの設定よりドライブ容量が小さい場合、「ONE DOWN L」、「SYSTEM DOWN L」となりブザーで警告します。

## 2.5 バックグラウンドパラメータ解説

RDS-LP は、メンテナンス用にバックグラウンドパラメータを持っています。

### 2.5.1 バックグラウンドパラメータ設定方法

以下に手順および解説を示しますので、目的を十分理解した上でご使用ください。

- 1 . MODE スイッチと SELECT スイッチ両方を押しながら電源スイッチを入れます。

PARAM SETTING!

- 2 . 次に SELECT スイッチを押します。

Firm Ver.x.xxx

RDS-LP のファームウェアのレビジョンを示します。

3 . SELECT スイッチを押します。

VendID : TEXA

ベンダー ID を示します。

4 . SELECT スイッチを押します。

RDS-xxxLP

RDS-LP シリーズのデバイス ID を示します。

5 . SELECT スイッチを押します。

S/N ID : 00xxxxxx

製品のシリアル番号を示します。

6 . SELECT スイッチを押します。

Fixed Para End

固定パラメータの終了を示します。

以降、MODE スイッチを押すことにより、バックグラウンドパラメータモードに入ります。  
 なお、Firm Ver.、Vend ID、デバイスID、S/N ID のいずれかの表示が出ている時、MODE スイッチを押すとバックグラウンドモードに入ることができます。( 枠の中はデフォルトです。 )

以下、順次 MODE スイッチを押すことで、バックグラウンドパラメータ内容が変わります。


### ホスト側 SCSI の最大同期転送速度設定

Max Syn 80/160MB

80/160MB、40/80MB、20/40MB、10/20MB、  
 5/10MB  
 ▲ Narrow ▲ Wide

ホスト側 SCSI の最大同期転送速度の設定です。

SCSI ケーブル等の問題で、通信トラブル(ハングアップやパリティエラー等)が発生する場合、設定をより低い値に変更することで回避できる可能性があります。

また、ディジーチェーン等を行った場合に、SCSI ケーブル長の問題で通信トラブルが発生することがありますのでその場合についても有効です。  「第1章 1.8 他の機器の増設」

他社製 Ultra SCSI 機器をディジーチェーンする場合、通信エラーが発生する可能性が考えられますのでご注意ください。

Low Voltage Differential Mode で最大転送速度は160MB/Sec ですが、シングルエンデッドのホストインターフェイスボードやSCSI 機器を接続すると、最大転送速度が40MB/Sec となります。この場合、SCSI ケーブルの総延長を1.5m 以内にしてください。

### ドライブ側最大同期転送速度設定

Ultra DMA 66MHz

「Ultra DMA 66MHz」に固定されています。

### ホスト側SCSI Bus サイズ設定

SCSI Bus 16 Bits

8 Bits、16 Bits

Wide Ultra SCSI の場合、「16 Bits」に設定。

Ultra SCSI の場合、「8 Bits」に設定。

### ライトリトライモード設定

WRITE RETRY

NO WRITE RETRY、WRITE RETRY

RAID-3/5 に於ける NORMAL モードでリード/ライトの際、エラーが発生すると一時的にリカバー動作に類似した動作を行うことにより、コントローラ内部で復旧処理を行うように制御されています。

WRITE RETRY : エラーを検出した時点で、一時的にリカバー動作に類似した動作を行います。

NO WRITE RETRY : エラーを検出した時点で、即 ONE DOWN 状態に遷移します。

 「第4章 4.11 リトライエラー検出機能表示/ドライブ SENSE DATA 表示」

### 同期ネゴシエーション設定

NO NEGOTIATION/Auto SP

NEGOTIATION/Force SP、NO NEGOTIATION/Force SP、  
NEGOTIATION/Auto SP、NO NEGOTIATION/Auto SP

これらは、2つのパラメータの組み合わせで設定します。

「NEGOTIATION」は、ホストが動作中に RDS-LP にのみ電源 ON/OFF が発生した場合に、ターゲット (RDS-LP) からイニシエータ (ホスト) に対して同期のネゴシエーションを行い、「NO NEGOTIATION」の場合は行いません。通常、「NO NEGOTIATION」で使用します。

「AUTO SP」は、ドライブに対して Mode Select コマンドを発行して、強制的にスピンドル同期をとらせるモードです。通常「AUTO」で使用します。

まれに自動同期でないドライブを使用して、スピンドル同期信号を使用したい場合のみ「FORCE」に設定します。(オプション)

### Restore Pointers 設定

NO RESTORE PTR

RESTORE POINTERS、NO RESTORE PTR

OS によって、リセクション後に、Restore Pointers Message を発行すると問題が発生します。本モードは、このメッセージの発行を禁止する為のモードです。

### コマンドキューイング設定

NO CDB QUEUING

NO CDB QUEUING、CDB QUEUING

コマンドキューイングを有効にするか無効にするかの設定です。

基本的には互いに独立した複数プロセスが、ディスクアクセスを連続的に実行している環境で有効です。

但し、OS がコマンドキューイングに対応していない場合、この設定は意味を持ちません。

実際に効果を得るためには、UNIX、Windows NT、Windows 2000 が必要となります。

複数プロセスを同時進行している環境で、ディスクアクセスが連続的に発生している場合は、「CDB QUEUING」にすると、プロセスの実行切り替えがスムーズになることが多く、操作性が向上する場合があります。

単一プロセスで動作している場合は、場合によって遅くなる場合がありますが、複雑なデータベースアクセスでは、単一プロセスでも効果が出る場合があります。

RAID の内部キャッシュ処理能力は、単一 HDD よりも強力ですので、ホスト CPU の性能によっては、コマンドキューイングの処理オーバーヘッドによる CPU の処理速度低下の方が大きく、全体として処理速度が低下することもあります。

処理速度を気にするアプリケーションを使用する場合は、そのアプリケーションの処理速度を「CDB QUEUING」、「NO CDB QUEUING」それぞれで測定し、比較して速度の速い方を選択する事が有効です。

### パリティモード設定

ENABLE PARITY

ENABLE、DISABLE

パリティを有効にするか無効にするかの設定です。

### バッファセグメントサイズ設定

BUF SEG 64KB/CH
-----------------

8KB/CH、16KB/CH、32KB/CH、64KB/CH

ドライブ1CH 当たりのバッファセグメントサイズの設定を行うモードです。

1 回のコマンド発行時のデータブロックサイズが大きい処理を行う場合、大きな値に設定することでシーケンシャルの転送速度が上昇します。

逆にブロックサイズが小さなアクセスの場合、特にランダムアクセスが多発するような環境の場合、小さく設定することで転送速度(Write)が上昇します。

いずれもシステムの環境に合わせて設定してください。

### リトライ開始時間設定

RETRY TIME 5S
---------------

25S、10S、5S、1S、0.1S

タイムアウトによるリトライを開始するまでの時間を設定します。

この時間の2~3 倍程度が実際の処理時間となります。(「1S」、「0.1S」は、TEST 用)

何らかの障害により、リトライ処理中に OS 側からのタイムアウトが先に発行されるような場合、OS 側のタイムアウト時間を長く設定してください。

### シーケンシャルリスト設定

SEQ. LIST 64
--------------

8、16、32、64、128

シーケンシャルアクセスかランダムアクセスかを判断する表の大きさの設定です。

同時に発生するストリーム(シーケンシャルアクセス)数と、キャッシュメモリの大きさから決定します。

同時発生ストリーム数が大きい場合、より大きな値に設定することに意味はありますが、本モデルの搭載キャッシュは64MB のため、「64」が適当です。

### シーケンシャルアヘッド設定

SEQ. AHEAD 4 TMS
------------------

2、4、8、16、32

シーケンシャルアクセスの先読み長(Read Ahead)は、固定先読み長か、この数とアクセスサイズの積のいずれか大きい方の長さを使用しています。

この値が大きいとキャッシュを大量に消費します。  
 同時発生ストリーム数が大きい場合で、キャッシュメモリ容量が少ない場合、シーケンシャルリスト数を大きく取りたい場合は、「4 TMS」の方が有効な場合があります。  
 一般的にホスト側の転送能力が低いと小さな値、能力が高い場合に大きな値に設定します。

### キャッシュ制御設定

DPO/FUA ENABLE
----------------

ENABLE、DISABLE

SCSI 規格のキャッシュ制御用のフラグを有効にするか無効にするかの設定です。

DPO (Disable Page Out) : そのコマンドの実行によって、キャッシュ上にある他のデータを書き換えてよいかどうかを指定します。

FUA (Force Unit Access) : そのコマンドの実行時に、ドライブアクセスを強制するかどうかを指定します。

詳細については、SCSI-2 規格書等を参照ください。

### 低速ドライブ検出時間設定

CHK DELAY 1S
--------------

NONE、0.1S、0.5S、1S、5S


低速のドライブ検出時間の設定で、最初に処理を終了したドライブからどれくらい遅い時間に検出するかの時間設定です。(「0.1S」、「0.5S」は、TEST 用)

「NONE」の場合および「ONE DOWN」、「SYSTEM DOWN」の時は機能しません。

ある処理を行った場合、特定のドライブがメディア内部のリトライ等により、他のドライブより処理時間が必要以上にかかった場合、全体として処理終了時間が遅くなってしまいます。(転送速度が遅くなる)

この場合、遅いドライブを特定することで、予防的保守の意味でドライブの交換を促します。

遅いドライブについては、LCD 上に CH 表示がされます。

 「第4章 4.9.2 Most Delay CH 表示」

### Power On スタンバイ時間設定

POWER ON 5S
-------------

1S、5S、10S、15S、20S

ドライブによっては、電源投入時しばらくアクセスできない場合があります。

この間、RDS-LP は、ホストからのコマンドに対してアクセスすることなく(例えば、Test Unit Ready に対しては Not Ready)応答します。

### ドライブReady 待ち時間設定

WAIT READY 1 MIN

1 MIN、3 MIN、5 MIN

ドライブの Ready を待つ時間の設定です。

Power On 後、一定時間経過してもドライブが Ready にならない場合 DOWN 処理しますが、高回転ドライブによっては、Ready になるまで非常に長い時間を要する場合があります。

### キャッシュメモリのチェック時間設定

CHECK CACHE NORM

NORM、FAST、NO

電源投入後、バックグラウンドでのキャッシュメモリチェックの高速チェックと通常チェックとの切り替えです。

搭載キャッシュメモリの容量が大きくなると、チェック終了まで時間がかかりますので、通電後早い時間にキャッシュを有効にしたい場合は、「FAST」に変更してください。

### HDD パトロール機能設定

AUTO HDD PATROL

NO、AUTO


バックグラウンドでディスク面のリードチェックを行います。(RAID-0 は機能しません)

リードできないセクタが発見された場合、他のドライブから生成したデータを書き戻して復旧します。(Rewrite 機能)

NO : Auto Patrol しません。

AUTO : Auto Patrol Mode に入ります。

ホストからのアクセスの合間をぬって、LBA 0 から順に Disk Read を行います。

Patrol Mode は稼働中でも切り替えが可能です。  「第4章 4.9.3 Patrol Mode 切り替え表示」

### パトロール待ち時間設定

PATROL WAIT 5S

10S、5S、3S

何秒ごとにパトロールするかの設定です。

1 回のパトロールは、バッファセグメントサイズで設定されたサイズで実行されます。

---

次に、MODE スイッチを押すことで、フォアグラウンドパラメータに移ります。

### 2.5.2 パラメータ確認方法

パラメータの設定内容の確認は、動作中にも確認することができます。  
前面パネルのMODE スイッチとSELECT スイッチの両方を同時に押してください。  
最初に Firmware のバージョンが表示されて、以下 MODE スイッチを順次押すことによって設定内容が表示されます。

## 出荷時の初期設定

PARAMETER	LCD Display	備 考
Firm ware	Firm Ver. x.xxx	Ver.UP されるごと変わります。
Vendor ID	VendID: TEXA	
Model No	RDS-xxxLP	モデルにより異なります。
Serial No	S/N ID : 00xxxxx	製品により異なります。
Raid Mode	RAID MODE 5	
Drive Mode	DRIVE MODE 3	
SCSI Bus Size	SCSI Bus 16 Bits	
Max Sync	Max Syn 80/160MB	
Max HD Sync	Ultra DMA 66MHz	固定されています。
Disk	xxxGB xxxx	モデルにより異なります。
Cache Size	CACHE 64MB	
SCSI ID	SCSI ID 0	
LUN Size	LUN SIZE FULL	
Parity Stripe	STRIPE 2 MB/CH	
Read Ahead	READ AHEAD 64KB	
Recover Wait	RECVR INTV 5S	
Write Mode	W PEND 0.1Sec	
Retry Time	RETRY TIME 5S	
DPO/FUA	DPO/FUA ENABLE	
Recover LBN	RCV LBN 96KB	
Check Delay	CHK DELAY 1S	
Power On Wait	POWER ON 5S	
Wait Ready	WAIT READY 1 MIN	
Sequential Ahead	SEQ. AHEAD 4 TMS	
Check Cache	CHECK CACHE NORM	
Auto Patrol	AUTO HDD PATROL	
Patrol Wait Time	PATROL WAIT 5S	
Write Retry	WRITE RETRY	
Negotiation	NO NEGO/Auto SP	
Restore pointers	NO RESTORE PTR	
Queuing	NO CDB QUEUING	
Parity	ENABLE PARITY	
Buffer Segment	BUF SEG 64KB/CH	
Sequential List	SEQ. LIST 64	
Verify Wait	V WAIT , R aft W	

## 2.6 スイッチ操作方法一覧

RDS-LP のスイッチ操作方法を以下に示します。

項 目	操 作	
強制リセット	<b>MODE</b> + 電源ON	
警告ブザーの停止	<b>MODE</b>	
パラ メー タ 設 定	開 始	<b>MODE</b> + <b>SELECT</b> + 電源ON
	項目の変更	パラメータ設定中 <b>MODE</b>
	内容の変更	パラメータ設定中 <b>SELECT</b>
	設定の書き込み	パラメータ設定中 <b>MODE</b> + <b>SELECT</b>
	設定の取り消し	変更中にそのまま電源を切る。
ス テ ー タ ス 情 報	パラメータ内容確認	動作中 <b>MODE</b> + <b>SELECT</b> <b>MODE</b> で、順次確認できます。
	エラーステータス確認	動作中 <b>SELECT</b> <b>MODE</b> + <b>SELECT</b> で解除。
	リトライ表示消去	動作中 <b>MODE</b> + <b>SELECT</b> 2回押す。
	パフォーマンス情報	パラメータ内容確認中 <b>SELECT</b> <b>MODE</b> で、各ドライブを順次確認できます。
	遅いドライブ確認	パフォーマンス確認後 <b>MODE</b>
	PATROL Mode 切り替え (Auto、Force、No)	遅いドライブ確認後 <b>MODE</b> <b>SELECT</b> で、切り替える。



